

農業高校の生産実習と人間形成

～生産労働で培われる子ども達の発達～

内山雄平

はじめに

全国学力テスト政策によって、小・中学校の子どもたちは過度の競争教育に追い立てられ、不登校、いじめなどの誘因となり社会問題ともなっている。そのもとで、高校進学は成績によって振り分けられ、農業高校志望の動機は、必ずしも農業を好きとは限らない。

しかし、入学後学習を経るに従って、自然を相手の農業生産の体験によつて、農業に対する考えが大きく転換する。それに留まらず、五感をすべて使う農業体験から、自分のそれからの生き方を見出すことにつながる。栽培や飼育の生産に伴う労働は、子どもたちを

どう変える力があるのかを、次の4つの実践例から考えてみたい。

なお、これら実践例は、全国農業教育研究会（全農研）の長年の蓄積から、選んだものでその基準は、研究会で高い評価を得たことなどであるが、最終的には私の視点による。（註1）

1 競争教育から解放される環境

最初に茨城・水戸農業高校の戸井正則さんの「競争についてゆけない子どもたちが学ぶ農業」（2013年）を取り上げよう。テスト漬けの中学校生活から解放された子どもの喜びの叫びが聞こえるようである。「ボクはいい学校に来た」入学して2カ月余、田植

えが終わって青々とし始めた眼下の水田に目をやりながら、彼はささやくように言った。今思うと涙目だったかもしれない。10 haの水田の先には競走馬が草を食み、畜舎群が木々の間に見える。左には60種類の作物を無農薬・無化学肥料で栽培する圃場が、そのさらに左手前には果樹園が広がっている。生徒たちは試験管を洗いながら、この風景を「いいよね」「ボク好きなんだこの景色」と言う。

あまりにも沈んだ声音にドキツとして私は一瞬躊躇したが爆発物にでも触るかのように「この学校のどこがそんなにいいの」と聞いてみた。彼は「この学校はテストをやらない」と、中学で頻繁に行われるテストの重圧があつたことを吐露した。私が年5回の定期テストはあることをいうと「そのぐらいはいいよ」と答えた。毎週、教科によっては毎時間行われるテストは、彼にとつてはできないことに烙印を押されるためのテストでしかなかったのだ。

極端な低学力の原因に愛情不足があげられているが私はそれに加えて教室や学校という本来知的であらねばならない空間からの隔離状態が起こっていると見ている。教室や学校では授業についてゆけないとなれば、



友人や教員との間に距離をおかざるを得ない。

私は課題研究の授業でランの変異体をつくり、総合実習でその苗を温室栽培するということを経験している。その際重視するのは、ランに魅力を感じ、愛着を持つているか

ある。咲いた花を生徒たちに持ちかえらせるが、その際に祖母や叔母に持って行けば小遣いをくれるぞと言っても実行する生徒はほとんどいない。

実際に持ち帰ったある男子生徒が「先生、バアーちゃんがホントに5000円くれた！ビックリした」と報告してきた。学校では数百円で売っているデンファレであつたが、その男子生徒は世の大人たちがランの花を

どう見ているか知らず、祖母が自分をどう見ているかも知らない、つまり祖母の愛情を感じていなかったのだ。ランの花の大人の評価を通して、その男子生徒は初めて祖母の愛情を知ったのである。

家庭でも学校でも競争空間で満ちているため、愛情は消えて冷たく暗い空間になっている。多くの子どもは愛情を感じられない空間で学習意欲がわくはずがない。競争についてゆけない子どもたちがそれでも生きてゆくためには、冷たい競争空間からの隔離を自ら図って居場所を確保することになる。

ある女子生徒は小学校時代の自分の体験を語ってくれた。どこの小学校でも低学年では連絡ノートを子どもに持たせている。明日の行事、持参するもの、宿題を書いて最後に担任が検印して家庭に持ち帰らせる。それを女子生徒は母親に見せる前に薄く書いた宿題の部分を消してしまう。母親は宿題はないと理解し、宿題をやらなくてすむ。

たぶん宿題をやろうとしてもできないという子どもに丁寧に教える母親はそう多くないだろうと私は想像する。それどころか宿題ができない、やろうとしない子どもを叱っているのではないか。そうだとすると子

どもからみればそこには親子間の愛情は感じられなくなる。

その女子生徒の告白は課題研究の授業で一人になったときで、私から何か問いかけをしたわけでもない。問題意識を持つて見ていたわけでもない。突然「ねね、先生知っている」と話しかけてきた。母親にも言わずに抱えてきた秘密を誰かに聴いてもらいたかったのだろう。

戸井田さんの日頃の生徒への愛情たつぷりの姿勢が、生み出した実践にちがいない。彼女は、歯科衛生士専門学校で学び、その道に進んでいるという。

2 農業入門の手引き

「農業基礎」で何を学んだか

新潟・長岡農業高校の飯田耕平さんは、「農業基礎」で何を学ぶかの問題を提起した。1986年の実践だが、今日に通じるものである。

農業高校に入学する生徒は、農業の専門教科を学ぶために、1年次に農業入門となる「農業基礎」を学ぶ（その後の改訂で「農業科学基礎」と「環境科学基礎」に分かれ、今次2022年の改訂で整理統合して「農業

と環境」が新設された。初めての農業科目として「農業基礎」を学ぶことで、何をどう身につけることができたか、次に見てみよう。

飯田さんは、農業（農作業）体験の乏しい生徒にこの科目を通して必要な作業体験をさせるために身近なイネを取り上げた。作業実習と並行して、調査・観察・実験を行い、イネの成長のしくみや法則性を習得し、興味や関心を高めて、2年次以降の農業学習につなげた。

実践する上で心がけたことは、田んぼを教室とし、手と足を用いてイネを育て、鍬、鎌に代表される手作業を中心に行う。また、生徒が理解しやすくするために、まず作業体験、実験、観察を行い、その後その意味を考える帰納法的学習法を取り入れた。

また、イネの成長のしかた・法則性を理解するために、草丈、莖数、葉令などを継続的に調査した。イネ株を抜き取り、葉の出方、分けつの仕方、根の出方を観察するとそれぞれの関係を知ることが出来る。草丈、莖数を調べていくと、イネの成長の早さに驚く。他人のイネと比較して少しでも勝っていると喜んだりもす

る。

これらの目標を達成する方法として、プロジェクト学習法を導入した。この課題（テーマ）設定は、テーマが単純で、結果がわかりやすいものとした。例えば、「種まき量によるイネの生育と収量におよぼす影響」を、1粒まき区、標準まき区（3〜4粒）、多粒まき区（6〜8粒）に分け、苗の成長、本田での成長および収量への影響を、それぞれ、班別の生徒に選ばせ調査を実施する。

生徒は、「農業基礎」をどう学び、何を得たか、一年間の最後の授業での感想文から見よう。

○（T君）「イネを作ってみて、大変ということを学んだ。なぜかと言うと、米の生育をやる前は、米は自然にできると思っていた。まず、米（種籾）を田にまき、水と肥料をくれればいいと思った。

しかし、田は、まず、くわで耕さなければいけないし、米は米（苗）で別の所で育ててやったし、田植えはいちいち手で2本ぐらいずつ植えていかなければいけないので、大変だった。秋になった。田は米つぶて一色のようになった。やったと思った。これが自分で

作った米なんだなあと感激した。また米作りをしたい
と思った」。

○(○君)「普段何気なく食べている米でも、こうして
実際に体験してみても、米とはやはり生活から切り離れ
ない大事な日本人の食物だと思った」。

○(K君)「いままで考えていたイネの生育というのは
もっと簡単に、単純な作業だとはばかり思っていました。
イネの生育はいろいろな肥料の種類や生育調査など、
特に生育調査では、イネの細かい名称、生育状態など
を細かく正確に調べて、それが今後のイネの生育に役
立っていくという点で、自分で思っていたより近代的
(科学的)でなかなか進んでいました」。

自分で作業を体験してみようやくイネのことを生
き物として感じてきました。生育調査をしていると、
イネがどんどん大きくなり、やがて穂を実らす、それ
までの世話を自分たちの手でやりとげる。そういう喜
びを知り、また苦しみを知る。それが農業だと思いま
す。もし、自分がこの農業高校に入学していなかった
ら農業というものに見向きもしないまま農業を軽蔑し
たに違いありません」。

生徒たちはこれまで頭で描いていた農業に対する見

方と、体ごと作業体験によって得られたものとは全く
異なり、農業そのものを深く捉え、今後の学習に備え
ようとしている。イネを育てる中で、生き物と感じ、
一定の法則性に従って成長し、収穫できる事を学んだ。
「こうして自分たちの手で作った米を食べる試食会
は最高の味だったと感動し、自らの責任でやり遂げた
喜びを知る。自分が作った米だという感動は調査した
イネとの関わり合いの中からしか生まれてこない」と
飯田さんは述懐する。(註2)

3 生徒とともに伝統野菜(大内カブラ)の ブランド化をめざす

500年以上も歴史があると言われる伝統野菜大内
カブラを、地域振興に生かしたいと、生徒とともに地
域の特産品として商品化を図った渋谷清孝さん(京都・
北桑田高校美山分校1981〜2015年、途中7カ年
他校に転勤)の取り組みを私なりにまとめてみた。

絶滅寸前の大内カブラを復活

地域で絶滅しかけていた大内カブラを最初に、世に
紹介したのは生徒のプロジェクト調査研究によってで

ある（美山分校の元教員・村山隆『たにし学校』著註3）。

大内カブラは、寺でお講汁として振る舞われてきた伝統野菜だが、甘みが強く煮崩れしない一方、繊維質でひげが多く生産されなくなった。

1994年、この大内に定住した渋谷さんは当時の府立農業総合試験場に残されていた大内カブラの種を譲り受け、教材として授業で栽培しながら、特産品化を模索してきた。

かねてから地産地消を重視し、地元の農家に野菜の栽培を委託していた美山町給食センターから、お講汁を「地域の伝統食を学校給食に」と、生徒が栽培した大内カブラの注文を受けた。旧美山町の小中学校に500食提供した。この給食日に栽培した生徒たちが招待された。

お礼に生徒は大内カブラのいわれや栽培技術をスライドを使ってわかりやすく説明。小学生の活発な意見や「おいしかった」という感想が出され、ある生徒は「みんなおいしそうに食べてくれて、初めて作りがいを知ったいい体験でした」と。「何のための栽培学習か、これほどはつきりしたことはない」と渋谷さんは

述べて、更にその商品化に進む。

大内カブラの商品化で地域おこし

京都・美山は、「日本一の田舎作り」と取り組んできた。若生原生林をはじめ、とくに茅葺き集落を中心として日本の農村の原風景が残る町に、人口約5000人のところ年間70万人の観光客が訪れる。こうした観光客を相手に、「農」を中心とした特産品づくりなど、ものづくりが求められていた。

学校農業クラブの「大内カブラプロジェクト」チームは、南丹市の「市民提案型まちづくり活動支援資金」を受け、これまで栽培してきた大内カブラの漬け物の開発と商品化に取り組み、数百年の大内カブラの歴史のなかで初めて商品として売り出すことができた。

また、1年生の「農業科学基礎」の授業で生徒はキビ栽培とキビ餅づくりに取り組む。赤く実った穂を刈り、それを束ねて干し、足踏み脱穀機、唐箕、電動石臼などの古い農具で、キビ粉までにすることがいかに大変かを体験した。

キビ粉を熱湯で練って、餅米といっしょに蒸し、美山分校最大イベントの文化祭で生徒や参加者が搗き、

文化祭で販売した。一方、ダイズを栽培し、ダイズからきな粉を作り、キビ餅にまぶした。こうして生徒の手で作らせたキビ餅は、今や「茅葺きの里」の特産品として名を馳せている。

卒業生の中には、「美山ふるさと(株)」が運営する「美山のめぐみ牛乳工房」で美山牛乳を活用して牛乳プリンや、ブルーベリーを使ったアイスクリームを、美山の特産品として開発するなど、地域おこしの先陣を切っている。

なお、現在教職を辞した渋谷さんは、卒業生らと連携し「大内カブラプロジェクト」を結成し、大内かぶのジェラードを加工、かぶのおやきの製造、カブラ菜花の販売を手がけ、自身もブルーベリー栽培と観光摘み取りなど、美山町地域振興部長として過疎地における地域づくりに活躍されている。(註4)

4 普通科分校に農業教育を取り入れる

全国的に珍しい普通学科で学ぶ生徒たちに、農業教育を普通教育として位置づけた分校で、子どもたちがどう農業と向き合い、人間形成が図られたか、農業教育のもつ教育的意義を表す実践である。

― 兵庫・篠山産業高校丹南分校のとりくみ ―

1974(昭和49)年、丹南分校は、それまでの農業科を普通学科に転科した。藤原和正さんを中心とする教師集団は生徒の立場に立ち、昼夜たがわぬ徹底した討議で教育理念を明らかにし、職業科目を取り入れた教育課程を地域住民に公開し、住民からも支持を得た。農業教育を中心に、人間の全面発達をめざして、地域に結びついた学校づくりをすすめる、市民権を得て10数年以上続いた。

1979(昭和54)年度に兵庫県の勤労体験学習推進校に指定され、1980(昭和60)年度・1981(昭和61)年度は文部省の勤労体験学習研究校の指定を受けた。

農業教育を取り入れた普通科のねらい

普通科で農業を学ぶねらいを次のように設定する。

- ①教育(座学)と生産労働(実習)を結びつけ、全面発達した人間を育てる。
- ②生産実習は、今までの学習の成果を応用し実践するものであり、実習を通して普通科を学ぶ意義を一層明確にする。
- ③農業の学習を通して、本当の学習のしかた、学習のあり方を学ぶ。
- ④

地域の歴史、現実、課題を学び、地域との結びつきを強め、地域の教育センター的役割を果たす。⑤生産実習を通して、ホーム・ルーム、仲間づくりを、さらに強固なものにする。⑥基本的生産技術を習得する。

入学する生徒に普通科でありながら、なぜ農業を学ぶのか、毎年次のように説明する。

「①農業からすべての産業、文化が発達してきた。農業は産業、文化の母体である。②農業は、人類の衣食住はもとより、生活環境を守っていくうえで、私達の生活に欠かせない。③農業は地味で目立たない職業だが働くことを大切にし、生きるものを大切にする。④働くことが今日の社会を作ってきたのであり、決して一部の天才や博士ではない。⑤いま、社会全体で農業や生活環境が壊されてきている。⑥地域の産業の中心は農業である。⑦労働の尊さ、喜びは頭で考えたり、本を読んでも分からない。実際に体験することが大切だ。⑧私たちはどんな人間にならねばならないのだろうか、働く人が大切にされ、差別のない社会をつくらう。」と、これは、国民誰でもが身につけるべき国民的教養として大切な内容を含んでいるように思う。

農業科目の学習をどうすすめたか

1年生は（「農業基礎」3単位必修）水稻の栽培および調査、一人一作の大根栽培と他にナス栽培を行う。

2・3年生になると、学校が地域の要望を受けて次の取り組みをすすめる。2年生は、学校給食センターと契約し馬鈴薯の栽培と調査を行う。

また、3年生男子（「野菜」4単位）は、2年次後半から計画・準備をすすめてきた班別栽培（スイカ班と稲班）に分かれる。スイカ班は、地元の農協の依頼を受け、地域の特産物の一つである「大山西瓜」を中心に4品種の栽培試験を行う。一方、稲班は、農業改良普及所から依頼され、指導を受けながら、地域適性品種を求める品種比較試験を実施した（1985年度）。女子は（2年生「農業基礎」1単位）男子と同様の馬鈴薯の栽培、ハクサイの栽培の他に、春播き草花および秋菊を栽培し、校内の緑化・美化活動をすすめる。

これらの農場作物の管理運営は生徒の手で行う。3年生を班長とした全校縦割りの農場当番を作り、生徒会農業部の活動と、上級生を核とした全校集団づくりを強化し、放課後や、長期休業中の農場管理実習を行う

た。

一方、毎年学校行事として山林の下草刈実習を継続している。全職員の指導のもとに、地域共有林の山林下草刈を、地元の山林関係者の援助を受け、全校生徒が1日ばかりで下草刈りを行う。

この作業を終えた生徒の手記は次のようである。

○(3年男子A君)「緑化というものが、自然の調和を取るためにいかに大切であるかを三年間の下草刈実習が教えてくれた。だが一年生の時の、いやではずかしいなどという気持は今ではもうない。自信をもって、「私の学校は普通科ではありませんが、農業教育を取り入れた勤労体験学習を実施しています」と言える。

他の学校には、まねのできないことをやってきた自信はこれからの人生にとっても役立つと思う。入学した時に、先生や先輩に、「卒業する時には本当に良かったと思うぞ」と言われ「何ぬかすか」と思った私だが、今では、それが本当のことになってしまった」。

また、卒業論文を書き終えた生徒は、次のように綴る。

○(3年男子B君)「入学した時、農業があると聞いていたが、簡単なものであろうと思っていた。しかし実

際は実習服を着て、田で泥まみれになって働くので。

灰色の実習服を着るだけでも拒絶反応をもつほどであった。暑い時や休み中でも調査にいったり、遅れて水田の囲りを走らされたり、上級生にも当番で使われたりで、何でもこんなことせなあかんのかと思ったりもした。

しかし、2年生でナスを作るようになってから楽しさも出てきた。クラスの人もなれ、できたナスを友達と比べたり、作業のうまさを競ったものだ。3年生になって、班別栽培では、稲班に入った。この調査は、農業改良普及所より依頼があつて行なわれたもので、国の事業の一環であると聞いて、必ずよい結果を出したるワイと、やる気がわいた。1年の時よりも意義深く、稲の成長ぶりや、病害虫を観察するなかで、植物の神秘さを知った。秋の文化祭では、この調査、研究のまとめを発表し、みごとに成功させることができた。普通科で農業を取り入れることによって、得た仲間作りや、全校集団作りは、他校には負けないものを持っていると思う。地域との結びつきの強い学校も全国津々浦々探してもないのでなかるうか。入学当時ブツブツ言っていた私だが、今では本当によい学校であったと思う。全てが終ろうとしている今、私は大変うれしい」

普通科で、地域と深く結びついた農業教育の実践は、生徒が実習で学んでいることの意義をからだごと捉えていることが窺える。(註5)

まとめにかえて

全国の農業高校で学ぶ生徒数は、普通科73・2%に比して農業科2・5%と極端に少ない(工業科7・5%、商業科6・0%、総合学科5・2%・学校基本調査2016年5月1日)。

これは、「農業の経済的価値(生業)」を重視するあまり、「農業の人的価値・文化的価値」(農文協刊「農業の教育力」219p219)を軽視していることにほかならない。人間らしく生きることへの自信と希望へ繋げる農業教育の教育的価値を大切にしなければならない。

(註)

1 「全国農業教育研究会」は、小学校から大学までの教員や学生、出版社や農業者・研究者が参加し、日々の教育実践の成果を交流し合い、各地の農業の現場に学びながら、農業教育の教育的意義と必要性、果たして

いる役割を多くの人に広め、農業・農村、農業教育の発展を願う民間教育団体。

2 「農業基礎学習の3年間を振り返って」 飯田 耕平 (新潟・長岡農業高校) 農業教育研究No.10 (1986年)

3 この著書は、後に木村元(二橋大学大学院教授)らによる「人間形成と社会」シリーズで復刻され、「近代日本の人間形成と学校との関係を『地域』および『職業』に留意しながら眺望する」実践として評価される。(相原昭夫・農業教育研究No.37 2013年)

4 「農と地域の教育力を生かす」渋谷清孝(京都・北桑田高校美山分校) 全農研第40回福島熱塩加納大会レポ―ト(2010・8) 「美山野菜のブランド化と食と農の取り組み」農業教育研究No.40(2016年)

5 藤原和正(兵庫・篠山産業高校丹南分校) 農業教育研究 No.10 (1986年) No.29 (2005年)

(うちやま ゆうへい・事務局長)